

グローバルCOE 「死生学の展開と組織化」発足



グローバルCOEメンバー(一部)。第19回死生学研究会にて。



拠点リーダー 島 進

■グローバルCOE発足にあたって

立花 政夫 島 進 中川 恵一
熊野 純彦 嶋内 博愛

■企画案内

ワークショップ「生命科学と死生学の共働」
国際シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性」
リカレント教育
日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」

■今後の予定

■「死生学の展開と組織化」組織図



レイダーマン教授

イベント報告 Gary Laderman 教授講演会

「死生学の展開と組織化」の発足に期待して

立花 政夫（人文社会系研究科長・文学部長 心理学・視覚神経科学）

グローバルCOE研究拠点形成プログラム「死生学の展開と組織化」は、21世紀COE研究拠点形成プログラム「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」（2002～2006年度）の成果を踏まえて採択されたものである。21世紀COEプログラムの目的は、古今東西の死生観を比較研究し、また、死や生の価値についての理論的な研究を踏まえつつ、現代社会における死生の現場やケア・臨床の現場に生起する諸問題に回答することを通して、世界最高水準の先端的な研究拠点を開発し形成することであった。島園進教授を中心とした本研究科の教員や若手研究者は、医学系研究科や教育学系研究科などと連携し、ケアや医療現場の方々との交流を深めつつ、大変なエネルギーを費やして「死生学」という新しい学問分野を切り開いてきた。2007年4月には、財団法人上廣倫理財団の寄付により本研究科附属次世代人文学開発センターの創成部門に上廣死生学講座が設置され、清水哲郎教授と山崎浩司講師が着任し、21世紀COEプログラムの成果をさらに発展させるべく機能しはじめている。このような本研究科を中心とする死生学への取り組みが高く評価され、2007年度のグローバルCOE研究拠点プログラムに「死生学の展開と組織化」が採択された。ここでは、「死生学」の確立と若手研究者の育成という重い課題に取り組むことになる。

「死生学」の英語訳として、“Thanatology”（「死についての学」）ではなく、“Death and Life Studies”としているところが、このプログラムの重点が“死”のみにはないことを指し示している。「死生学」は、遺伝子治療・再生医療・生殖補助医療・クローン技術・アンチエイジング技術・ターミナルケアといった最先端の生命科学や現代の臨床現場における課題に直接向き合うことになる。しかし、爆発的に進展しつつある生命科学や医学における生や死の（未だ固まらない）概念と長い歳月をかけて人々の間に常識化された生と死の概念に齟齬が生じるのは当然である。爆発的に知識が集積しつつあるといっても、物質の誕生、生命の誕生、意識の誕生といった劇的なエマージェンスについて私たちは未だ無知であり、現在の生命科学では物質から生命を作り出すことはおろか、神



「死生学」の概念図（佐藤健二教授による）

経科学で意識を説明することすらできない。このような現状において、“古くさい”人文学に対する現代科学の優位性を言い立てても意味がない。「死生学」の展開には、相互の概念の違いを明らかにする地道な作業に取り組むことが必要であろう。

生と死の概念は、世界各地の文明・文化によってとらえ方が大きく異なっている。その差異を明らかにする上で、欧米のみならずアジア諸国との研究交流が極めて重要である。若手研究者の短期海外研修が本プログラムに組み込まれているのは大変に喜ばしい。

“死生”や“生死”を生命の誕生と終焉という一過性の現象として捉えるのではなく、「どう生きるか」という問いでもあると了解すれば、「人間とは何か」という人文社会系諸学における問いに帰着せざるをえない。したがって、「死生学」とこれまでに継承されてきた人文社会系諸学との積極的な交流を通して、両者の深化を図る必要がある。また、実践の場における倫理的問題と法制上の問題にかんしては、哲学・倫理学・法学等との対話も不可欠になる。このような意味で、人文社会系研究科を中心とした「死生学」の展開は、他研究科や社会との連携のみならず、次世代の人文社会系諸学のあり方に深く関わっている。大変多岐にわたる重要な課題に取り組む本プログラムの健やかな発展を大いに期待している。



グローバルCOE

「死生学の展開と組織化」の始まりにあたって

島 蘭 進 (本COE拠点リーダー 人文社会系研究科教授 宗教学宗教史学)

死生学は新しい学問である。それはまず医療と人文・社会系の接点で求められている。現代の病院は死に往く人々のケアに多くの力をさかねばならないが、自然科学的アプローチによる近代医学の枠内ではその方法がわからない。1960年代から欧米ではホスピス運動が急速に広がり、死に直面した患者や家族のニーズに応えるための死生学の教育・研究が進められるようになった。

生命倫理に関わる多くの問題が噴出してきたのも同時期である。臓器移植や体外受精や遺伝子診断が可能になり、これまではとても克服できなかった困難を超えて、人々の欲求を充たすことができる可能性が大幅に増大しつつある。だが、医療がその力を強めていく一方で、どこで医療の介入に限界線を引くのかという難しい問題に直面するようになってきた。このため医療臨床と医学研究の現場では日常的に死生観に基づく倫理的判断が問われるようになっていく。

だが、死生学が求められているのは、医療関係の現場からだけではない。教育現場でも死生観教育(デス・エデュケーション)への要望があり、子ども達に「いのちの尊厳」について教えることを求める声がある。そもそも現代人は死に向き合うすべを見失って、途方に暮れているように見える。葬送儀礼や墓制も急速に変化しつつあり、市民はとまどっている。慰霊や追悼のあり方についても論争が生じる。死者と生者の関わりのあり方は文化によって多様だったが、そのことを強く意識する時代ともなった。また、死と生は表裏一体の関係にあり、生殖や誕生、病や老いといった人生の危機にどう向き合うかに関わる諸問題を考察するのも死生学の課題である。

死や生命の危機とどう向き合うかが死生学の取り組むべき課題のすべてであるわけでもない。死生学はそもそも生命とは何かという生命観の問題、また、人間の生と死をどのように意味づけ理解するかという根本的な人間理解の問題を避けて通るわけにはいかない。とりあえずは現代の実践的な諸問題と関連づけながら、古今東西の哲学や宗教思想を検討し、新たな思考法を探究していくことになる。生命観や進化を



めぐる現代の新たな科学的知見の哲学的、思想的な意味を問い直すのも重要な課題である。環境倫理をめぐる問題、人間の生命と動物や植物の生命の関係をめぐる問題、戦争や刑罰をめぐる実践哲学的問題などもその守備範囲の一部である。

日本では早くも1904年に『死生観』という本が書かれ、ある意味では欧米諸国に先駆けて死生学研究が行われていた。西洋文化の影響を受けて、早くもこの時期に東洋人の死生観、日本人の死生観を強く意識するようになっていた。だが、今や世界各地で死生観を比較しあい、新たな状況に向き合うための模索が進んでいる。

こうした状況を踏まえ、東大の大学院人文社会系研究科(文学部)では2002年より医学部・教育学部などの他部局と協力しながら、21世紀COE「死生学の構築」プロジェクトを進めてきた。2007年から2012年春までのグローバルCOE「死生学の展開と組織化」では、これを踏まえ、新たな学問領域の確立と若手研究者の育成を目指して、さらに強力な教育・研究体制を構築していく。東京大学の「死生学」プロジェクトの第2期として重い課題を担う。

第2期の死生学プロジェクトは、すでに21世紀COEで「構築」された基礎を踏まえて、死生学の「展開と組織化」を行うことを目標に掲げ

ているが、東京大学における死生学の恒久的な組織化に向けて、果たすべき課題は多い。具体的には、(1) 死生の文化の比較研究、(2) 死生の倫理や実践に関わる理論的哲学的考察、(3) 人文学の現代的実践現場への関与、という3つの課題に集約される。

このうち、(1)と(2)は従来の人文社会系研究科の教育・研究成果の蓄積の上に、ある方向性に向けて深化していくということになる。西洋の思想や学問のイニシアティブの下に進んできた「死生」をめぐる理論的、文化的考察を非西洋のさまざまな伝統とつきあわせながら新しい地平を切り開いていくことが目指される。西洋で「死学」(Death Studies, Thanatology)とよばれてきたものを、「死生学」(Death and Life Studies)とよんでその地平を示唆している。

(3)は人文社会系研究科にとってより多くの新しい課題を含む。現代のケアの実践の場で取り組まれている問題に、積極的に関わっていかうとするからだ。死に往く者、死に往く者を送る者、死者とともにあろうとする者、生死の危機や決断に迫られている者、こうした者をケアする者 こうした人々の問いに向き合っていく。医療や教育やケアの現場との交流が求められる。主にがん患者を対象とする緩和ケアはもっともわかりやすい例だ。とりあえずは、医療現場で働く人たちのリカレント教育に取り組む。医学部や医療関係者が力面している問題から多くを学びつつ、人文社会系の学問から提供できるものを考えていく。そのことが人文社会

系の学問の新たな活性化をもたらすことも展望している。

21世紀COEの第1期からグローバルCOEの第2期に移行して、新たに求められ強調されているのは、(1) 若手の教育・育成にいっそうの力を入れること、および(2) アジア諸地域との研究交流を深めることである。

(1) 社会からどのような人材が求められているかを注意深く見定めながら、若手研究者・大学院生に対して死生学に関わる学知の形成に参加していくよう促す。本来の専門的学知の深化に寄与しつつ、死生学を新たな専門的学知として形成していく、あるいはその可能性を探る。また、研究成果の外国語での発信力を高めるための支援を行う。

(2) 中国や韓国では確かに死生学への関心が高まりつつある。もちろんこれまで行ってきた欧米諸国との交流もいっそう拡充していく。イスラーム圏等、アジア諸地域の状況も見渡ししながら、グローバルな死生学の発展に貢献することを目指す。

5年間で将来の死生学の青写真がすっきり描き出せると考えるほど楽観的ではない。新たな領域の学問の形成と充実には長い時間がかかり、多くの人々の努力の積み重ねが必要だ。だが、長期にわたる発展のためのおおよその見取り図は、この期間に形を現すよう努める。及ばずながら、世界的にも新たな研究交流のあり方と学問分野の形成を促す試みとなることを願っている。また、グローバルな市民社会の新たな活力の小さな源泉の一つとなることをも希望してもいる。



21世紀CEOプログラム
「死生学の構築」からの出版物



死生学とがん医療の接点

中川 恵一（東京大学医学部附属病院 緩和ケア診療部長）

自然との触れ合いや宗教心がなくなり、急速に寿命が延びた結果、今の日本人は「死なない」という錯覚にとりつかれているように思える。確かに、都市生活のなか、死は日常生活にも、人々の意識にも存在しなくなっている。すべての人間に平等に訪れる死も、その95%を病院のなかに隔離してしまい、皮膚感覚で捉えることができなくなってしまった。戦争も兵役もないわが国で、現在、死に直結するイメージを与えるのは、がんである。まさに、がんこそが、現代の「メント・モリ」なのである。

さて、がんは、簡単に言えば、細胞の老化と言えらるため、世界一の長寿国であるわが国は、世界一のがん大国である。実際、日本人の2人に1人が、生涯にがん罹患する。しかし、死なない幻想にとらわれた人々にとって、唯一死を思い出させるがんという病気は、他人事にはかと思えない。その結果、日本人のがんに対する知識や態度、医療体制は、先進国のなかでは、とりわけ後進的である。このことは、がんの治療とケアのアンバランスに、とくに観察される。死を敗北、悪として忌避するムードを、医療者と患者が共有する結果、医療現場では、「治療ケア」の図式が成立してきた。しかし、治療とは、「治し、癒す」ことを意味する。実際、すべての医療機関に、医師とナースが勤務することは、「治」と「癒」の両立の必要性を示すものであろう。

欧米では、治療できないがんを持つ患者さん、痛みなどの症状を持つ患者さんとその家族の、全人的な苦しみを和らげることを主眼として、緩和ケアの考え方が確立している。これは、中世ヨーロッパにおいて、キリスト教の精神から、巡礼者、病人、貧窮者を救済したhospitium（ホテル、ホスピタルの語源）に起源を持つ。

一方、わが国のがんの医療体制のなかで、最も欠けてきたのが、この緩和ケアである。たとえば、がんの痛みの問題が象徴的である。がんの痛みを和らげることは、緩和ケアの最も重要な役割だが、その主流は、モルヒネあるいは類似薬物をクスリとして飲む方法である。モルヒネと聞くと、中毒など、悪いイメージがあるようだが、痛みのある方が使う場合には、中毒などの危険はなく、安全な方法である。このモル

ヒネの使用量が、日本はカナダ、オーストラリアの約7分の1、アメリカ、フランスの約4分の1程度と先進国のなかで最低レベルである。モルヒネとその関連薬物である、オピオイド全体について言えば、日本は米国のなんと20分の1程度で、世界平均以下の使用量である。言い方を変えれば、わが国のがん患者は、それだけ激しい痛みを耐えているのである。しかし、現実には、モルヒネなどを適切に使って痛みのない患者の方が長生きする傾向があるのだ。食事もとれ、睡眠も確保できるので、当然なのだが、モルヒネの悪いイメージはなかなか払拭できない。これも、やはり「治療 ケア」が根底にあるからだろう。生きている間を少しでも長くしようと思って、苦しい時間を増やしているところか、命の時間そのものも短くなってしまっているのだ。日本人の死生観の変容が、がんの医療においては、具体的な患者の損失として顕在化するのである。

そもそも、がん医療と死生学の密接な関係は、文科省が定める医学部におけるコアカリキュラムにも、以下のように死生学が取り上げられていることから明らかである。

人の死に関する到達目標：

- 1) 死の概念と定義や生物学的な個体の死を説明できる。
- 2) 死生学の基本的な考え方を概説できる。
- 3) 死に伴う家族のケアを説明できる。
- 4) 尊厳死と安楽死の概念を説明できる。
- 5) 植物状態と脳死の違いを説明できる。

今回のグローバルCOE「死生学の展開と組織化」の研究組織に加えて頂いたが、筆者が、東大病院で緩和ケアに取り組み始めた時に立てた目標の1つが、「東大全学での死の研究」であった。本COEでは、人文科学の現代的実践現場への関与にも重点を置いており、夢が叶ったことになる。今後、COEとがん医療との接点を広げることで、人文科学と医学が相互に刺激しあうダイナミックな展開を期待したい。

熊野 純彦（人文社会系研究科教授 倫理学）

週末には、たいてい連れ合いと買い物に出る。いわゆる共稼ぎなので、一週間分の食料を買いだめしておくためである。

近所のショッピングセンターの最上階に、ちいさなペットショップがあって、犬や猫、小鳥のほかに、ウサギやハムスターのたぐいが売られている。買い物にいくと、まずその階までのぼって、しばらく動物を眺めてすごす。もともとは、連れ合いは犬、私自身は猫と小鳥が好みであったけれども、最近ではもっぱらウサギとハムスターのケージのまえで足がとまってしまう。

毎週毎週、判で押したような会話が交わされる。「かわいいねえ」「かわいいねえ」「いきものとして「かわいい大きさ」というのがあるよね」「そうだよねえ、ほんとうにちょうどかわいい大きさだよねえ」「飼おうか?」「飼ってみようか?」「そうだねえ……」

結論はいつも決まっている。「でも、留守がちで、かわいそうだよねえ」「そうだねえ」「それに……」「それに……」「……すぐ死んじゃうしねえ」「死なれるとつらいもんねえ……」

あきもせず、おなじ会話を交わしている。夫婦を20年もやっている、そんなものである。

子どもがいたら、と思うことがある。たぶん、ハムスターを買い与えたことだろう。子どもは、きっと、ハムスターに死なれて、大泣きすることだろう。それでも、と考える。子どもはそういう経験もしたほうがいい。一箇の生命がはじまり、そしてひとつのサイクルをおえて、その生命が消えてゆくまでのあれこれに、かたわら

で寄りそい、立ちあう経験をしておいたほうがいい。

*

だれもが、じぶん一箇の生を生きる。それでも、だれもじぶんが生まれたときのことを憶えていない。だれにしても、じぶんが死ぬそのときに、最期まで立ちあうことはできないし、じぶんがこの世を立ち去った、そのあとのことを知ることもできない。じぶん一箇の生は、それでも、そもそもじぶんが生まれてこないことにははじまらないし、じぶんが死んでゆくことではじめて完結もするのだろう。じぶん一箇の生を、じぶん自身はそのひろがりのすべてにおいて立ちあい、知りつくすことができない。

死生学とは、おそらく、じぶん一箇の死生をうちにふくんで、生死のひろがりをそのすみずみまで考えようとするものだろう。すべての学がそうであるように、死生学もまた思考しようとする相手を対象化してとらえようとする傾向と無縁ではありえないことだろう。

このことは、だが、そもそも原理的に可能なのだろうか。じぶん一箇の生をうちにふくめた死生のひろがりを、その細部にいたるまで対象化しようとするのは、実現することのありうるころみなのだろうか。とりあえずの答えは、否定的なものとなるようにも思われる。

しかし、と思いは反転する。学はおしなべて、なんらか不可能と思えることがらへと手を伸ばすくわだてをふくんでいるのではないだろうか。学の理念のうちに、学の非完結性ということがふくまれているとすれば、それは学一般が避けがたくうちにはらむ不可能性への希求にもとづいているのではなからうか。

そんなことを考えながら、死生学構築への、いわば第二期を迎えようとしている。答えを急いではいない。



本プログラムが設置されている法文2号館



COE死生学プロジェクトに

ふたたび特任研究員として採用されて

嶋内 博愛（本COE研究拠点形成特任研究員 文化人類学）

ときは今から2年半前、21世紀COE「死生学の構築」が転換期を迎えた2005年の春のこと。COE研究員が追加公募されているのを偶然発見した一人のオーバードクターが、ダメで元々と思いつつも応募書類を投函した。その数週間後、幸運にも彼女は特任研究員としてそこへの参加を許されることになった。東大とは縁もゆかりもなかった彼女に届いた採用通知。速達を受けとったあの日の驚きと嬉しさを、そしてプロジェクトリーダーの島菌先生と初めて二人で話したときの緊張を、グローバルCOEでふたたび特任研究員として採用された今でも、彼女はときおり思い起こすという。この「彼女」とは、いうまでもなく私のことである。

そもそもなぜ私が21世紀COEの特任研究員に採用されたのか。察するに、採用にあたっては、ドイツに長期留学経験があったこと、そしてドイツ語圏の民間伝承を分析した、「他界の民族学的考察 Feuermann伝承と西欧の他界観」と題する博士論文を早稲田大学に提出していたことが、担当の先生のお目にとまったのではないかと推測しているが、いずれにしても2005年春が、私にとっての東大における新生活のスタートとなった。

21世紀COEで採用された当初は、東大内で右も左もわからない状態だった私だが、先生方はもちろん、先輩研究員や同期の研究員、そして事務補佐の方々に支えられつつ、研究・実務補佐の両面にわたってどうにかやってくることができた。こんな私が、今回、グローバルCOE出発に際し、若干の成り行きはあるものの、特任研究員に委ねられる実務のとりまとめ役を任されることになり、今は気持ちを新たにしつつも、わが身にのしかかる重責をかみしめている最中だ。まぶしかった先輩研究員たちの働きぶりを想起しつつ、そして、死生学がこれから向かおうとしている先にみえるきらめきに思いを巡らせつつ、自分に鞭打つ毎日である。

打ち明けてしまえば、2年半前、採用後最初の数週間は、「赤門をくぐる」ということ自体に胸を躍らせたほどだった。今ではそうした純朴なときめきを感じることはほとんどなくなったとはいえ、研鑽の場としてのCOE死生学は、私にとってかけがえない出会いの場であり、つ

ねに知的刺激を提供してくれる場にほかならない。ここでは、たとえ日常的にはあまり接点のない研究領域の人とであっても、「死生」という共通項をてがかりに、ふとしたきっかけから充実した会話を広げることができるからだ。そしてこうしたささやかな営みを、いずれきっと私なりの死生学へと発展したい。こんな思いと格闘しながらも、心地よい緊張感のなか、この場で研究できる幸せをかみしめ、わくわくする日々を過ごしている。

このユニークな研鑽の場の基盤を支えるのは、もちろん、直接COEの陣頭指揮にあたりご指導くださる島菌先生を筆頭に、COEプロジェクトに関係する諸先生方の、死生学を「構築」そして「展開、組織化」していこうとする熱い思いだろう。21世紀COEにひきつづいてグローバルCOEでも死生学に取り組んでいこうと決意された先生方の熱意は、筆舌に尽くしがたい。ともあれ、COE死生学に関わるようになった今、私は、今後たとえ立場が変わっても、何らかのかたちで死生学に関わり続け、その将来をみつめていきたいと心から考えている。

今後ともよろしくご指導いただければ幸いです。



Gary Laderman 教授講演会・報告

“Death in the United States: Past, Present, and Future”

島 蘭 進 (本COE拠点リーダー 人文社会系研究科教授 宗教学宗教学史学)

2007年8月2日、16時より約2時間、本郷キャンパス法文1号館219教室で、“Death in the United States: Past, Present, and Future”と題して、Gary Laderman教授による講演が行われた。Laderman教授はアメリカ合衆国アトランタ市近郊のエモリ大学で宗教学を講ずる学者で、現代アメリカの葬儀の歴史の研究でよく知られている。The Sacred Remains: American Attitudes Toward Death, 1799-1883 (Yale University Press, 1996)、Rest in Peace: A Cultural History of Death and the Funeral Home in Twentieth-Century America (Oxford University Press, 2003)などの著書がある。

この度の講演はこれまでの研究を総括しつつ、アメリカ合衆国の葬儀の歴史の全体を展望しようとしたものである。アメリカ合衆国における葬儀のもっとも大きな変容は19世紀の後半、南北戦争期以後に起こった。この時期に死体を装飾するエンバーミングの手法が確立し、現在のアメリカ的な葬儀の原型が成立する。それに続く変動は1960年代以降に起こっている。

この時期、Jessica MitfordによるThe American Way of Death (Simon & Schuster, 1963)が刊行され、商業化された葬儀のあり方が激しい批判を浴びたが、それは葬儀の大勢に変容をもたらすものではなかった。

しかし、この時期、多様な民族集団がそれぞれの仕方で葬儀を行う傾向が強まり、葬儀の多様化が進行することになった。将来のアメリカ合衆国の葬儀のあり方はこの多様化の中から見えてくることになるだろう。以上が講演のあらましである。

これに対して、日本、東アジア、ヨーロッパ、アメリカ合衆国における葬儀や葬祭業や墓地の変容に関心をもつ聴衆から、いくつかの問いが投げかけられた。東アジアやヨーロッパにおいては、20世紀末から21世紀初頭にかけて、大きな葬儀の変容が進行しており、19世紀の都市化に伴う変容よりもドラステックなものと受けとめられているが、アメリカ合衆国との事情の違いはどこにあるかが討議された。東アジアでは火葬の普及や親族構造の変容や政治体制の変化が重なり、複雑な変容が進行していることも確認された。

この分野も死生学の重要な一分野であり、今後もこうした集いや交流を研究プログラムに組み込んでいきたい。なお、この講演会を開催するにあたって、南山大学、日米教育委員会(フルブライト委員会)、フランス国立科学研究所(CNRS)からご協力いただいたことを付記しておく。



講演会風景



死生学ワークショップ

「生命科学と死生学の共働」のお知らせ

一ノ瀬 正樹（人文社会系研究科教授 哲学）

グローバルCOE「死生学の展開と組織化」および「応用倫理教育プログラム」は、このたび生命科学の研究者の方々をお招きし、ワークショップ「生命科学と死生学の共働」を開催することになりました。「死生学」はもともと広い含意を持つ研究領域であり、生命倫理や死生観といった人文的な主題を核としつつも、たとえば医療的意思決定、殺人行為、死刑制度、戦争論、食と環境の倫理、といったテーマを通じて、広く多様な分野へと越境してゆくことを本性としています。とりわけ、それが「Life Studies」をタイトルそのものに含む以上、「Life Science」

とのクロスオーバーは必然的です。今回は、こうした位置づけのもと、「生命科学」との共働の出発点となるべく、進化理論、精神医学、放射線科学、遺伝学の分野の第一線の研究者をお招きし、ワークショップを開催するに至りました。今後さらに、栄養学、薬学、動物行動学、森林生態学などの分野とも連携を深め、こうした共働を積み重ねていきたいと思えます。参加自由ですので、ご関心のある方はぜひふるってご参集ください。また、懇親会も行われますので、そちらにもどうぞご参加ください。プログラムは以下のようです。

ワークショップ「生命科学と死生学の共働」

場所・東京大学本郷キャンパス・法文2号館・教員談話室

日時・2007年12月1日（土曜日）午前11時より

プログラム

開会あいさつ(11:00～11:10)

第1セッション(11:10～12:30)

提題者・青木健一（東京大学理学系研究科）

演題・「ネアンデルタールとホモ・サピエンスの交替劇」

コメンテータ・一ノ瀬正樹（東京大学人文社会系研究科）

昼食(12:30～13:50)

第2セッション(13:50～15:10)

提題者・張賢徳（帝京大学医学部溝口病院精神科）

演題・「人はなぜ自殺するのか？」

コメンテータ・竹内整一（東京大学人文社会系研究科）

第3セッション(15:25～16:45)

提題者・中川恵一（東京大学医学系研究科）

演題・「日本人の死生観とがん治療」

コメンテータ・清水哲郎（東京大学人文社会系研究科）

第4セッション(17:00～18:20)

提題者・石浦章一（東京大学総合文化研究科）

演題・「こころの動きを分子レベルで語る」

コメンテータ・島蘭進（東京大学人文社会系研究科）

総合司会・下田正弘（東京大学人文社会系研究科）

熊野純彦（東京大学人文社会系研究科）

閉会あいさつ(18:20～18:30)

懇親会

国際シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性

東西比較の試み」開催にあたって

秋山 聰（人文社会系研究科准教授 美術史学）

ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』中には、修道院の聖遺物コレクションに夢中になる修道士見習いの若者に対して、師匠が「洗礼者ヨハネが19歳の頃の頭蓋骨を見たことがある」と言っていて、過度な感動を諷める一節があります。かつてこの箇所を読んだ折に、出開帳を諷刺した「頼朝公ご幼少の砌のされこうべ」という小咄と似ていることが妙に気になったものでした。留学中、各地の教会附属の宝物館で数多くの聖遺物を目の当たりにして、これらが崇敬の的であったことを肌で感じるとともに、同一聖人の同一部位が複数存在することも知り、エーコの諷刺の背景が多少とも理解できるような気にもなりました。しかし、この時点では、聖遺物が美術史学を学ぶ者の研究対象になりうるとは夢にも思っただけではありませんでした。

ところで、90年代に欧州で美術史を学んだ者にとって、ハンス・ベルティンクの『イメージと礼拝』は、避けて通ることは出来ない必読書でした。芸術の時代以前の造形イメージを、その本来のコンテクスト、つまりは宗教儀礼や宗教実践との関連において見直したこの大著は、その後の西洋美術研究に深甚な影響を与えています。その第14章では聖遺物と造形イメージとの間にいわば同盟のような関係があることが指摘されています。聖遺物とは聖性を帯びた人物の遺体・遺骨や遺品を指しますが、これらはそれ自体特別な外観を有しているわけではなく、それこそこの馬の骨やばろ屑とも、見分けはつきません。イメージはそうした聖遺物に崇敬を受けるにふさわしい外観を与えるという重要な役割を果たすことによって、元来イメージ全般に否定的であったキリスト教文化の中で、確実な地位を得ることになりました。この章では、いきなり見慣れた日本の地蔵菩薩像とその像内納入品の図版が登場したことにも驚きます。ベルティンクは聖遺物をイメージの中に納めるという行為が、キリスト教文化を超えた普遍的な営為であることの例証として、この地蔵菩薩像を引き合いに出していたのです。一連のキリスト教の図像中に一点だけ挿入された仏像の写真には、鮮烈な印象を受けました。と同時に、『薔薇の名前』と江戸小咄との妙な共通点を想起したものでした。

さて、今回グローバルCOE「死生学の展開と組織化」において、「死生と造形文化」という枠組みの中で、シンポジウムを立案するにあたり、上記の体験からテーマを発想してみることにしました。あれから十年あまりのうちに、西洋美術史では聖遺物とイメージの相関性は、ほとんどブームと行って良いほどに研究されはじめています。仏教美術研究においても、像内納入や骨灰像、舍利容器等についての研究は飛躍的に進展しているようです。しかしながらこの両分野にはあまり相互交流の試みがありません。そこで今回は、海外から2名、国内から2名の美術史家をお招きして、「聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み」と題したシンポジウムを開催してみようと思います。ラトガース大学のエリック・トゥーノ氏は、ローマ教皇の聖遺物コレクションについての研究で知られる方で、初期中世の視覚文化における聖遺物とイメージの関係について論じてくださいます。デングァー大学のスコット・B・モントゴメリー氏は、後期中世の肖像型聖遺物容器の専門家であり、中世の人々がこのような聖遺物容器をどのように知覚していたかについて具体的にお話くださる予定です。中国仏教彫刻史がご専門の肥田路美早稲田大学教授は、中国の文献史料を駆使して仏舍利と王権との関わりについて、日本仏教彫刻史がご専門の根立研京都大学教授は、肖像彫刻と遺骨信仰について最新の知見を交えながらお話くださいます。後半にはディスカッションを行なうことになりませんが、会場からの質疑にも対応する予定です。多少ともご興味を抱かれる方は是非ともご参加くださるようお願いいたします。



死生学研究成果を社会に還元する

リカレント教育企画

清水 哲郎（次世代人文学開発センター上廣死生学講座教授 哲学・臨床倫理学）

私たちは皆、自分たちが死に向かって生きているということを知っている。私たちの多くは、死を今日、明日のことではないと思っているが、しかしいつかは必ずそこに至ると知っている。まだまだ先のことだと思っている時には、このことは心の奥に隠されていて、いつも意識しているわけではないが、何かきっかけとなって、自らの死が、あるいは親しい者の死が、目の前に立ち現れると、哀しみを伴いつつ、この事実を意識することとなる。そうであればこそ、死を、ないしは死に向かって生きているという自らのあり方を、自らの中でどう位置づけるかということは、全ての人にとって（少なくとも潜在的には）大きな関心事となっている。そして、他ならぬこのことが、諸学問分野に対して横断的な死生学という領域を成り立たせている社会的な基盤なのである。

そうであれば、死生学という学問領域は、そのそもその成り立ちからして、全ての人へのこの関心事に対して何らかの応答をするという役割を負わされて、否、むしろ自ら引き受けていることになる。例えば、「日本人の死生観」といったテーマに関係する個別研究は、これまで思想史、文学、文化史、あるいは社会心理学や社会学といった既成の学問分野のなかでなされてきたであろう。が、それを死生学という領域の下に置き直して見ると、全ての人へのこの関心事に応えようとする学問的な営みを支える基礎研究というカテゴリーに属する個別研究として、位置づけをされ直すことになるであろう。

では、人文・社会系の諸分野でなされてきた死生観等に関わる諸研究を死生学の基礎研究とし、それらに支えられて、死生学は、全ての人への死という関心事にどう対応しようとするかということ、教育が重要な窓口となる。すでに「死の準備教育/デス・エデュケーション」というような名で一般の学生、市民を対象とした教育が提唱されてきているが、これを体系的にしっかりしたものとして整備、初等教育から大学・大学院、さらには生涯教育の中で活かされるようにするというのも、すべきことの一つである。今、私がG-COEの中で担当することとなったリカレント教育もまた、重要な窓口である。

私たちが企画しているリカレント教育は、さ

しあたって医療や介護の現場で働いているような、ケアの専門家を主たる対象とする。ケアの専門家たち（医師、看護師、ソーシャル・ワーカー、ケア・マネージャー等々）は、死にまさしく直面している、あるいは自らが生きているということと死を見比べつつあるような重篤な患者とその家族や、高齢のため心身がだんだん弱ってきて、人は皆死に向って生きているのだということが現実のこととなってきている介護利用者とその家族と向き合い、あるいはこうした人たちに寄り添いながら、ケアに従事している。死、ないし死に向かう最後の生をどう理解し、よりよい日々を過ごし得るようにどう支援したらよいかと考え、ここで活かせる専門的知識を求めている。これに応える活動が、目下企画中のリカレント教育に他ならない。さしあたって2008年1月に2日ないし3日間の集中コースを、試験的に実施する予定である。

だが、ここでなにより問題なのは、医療・介護の現場からの切なる求めに応え得る、どのような知を私たちは提供できるのかということである。人文・社会系の諸分野に由来する基礎研究の集積はあるとして、それを死に向かって（あるいはむしろ直面して）生きる現実の人に対して意味のある知の体系（あるいは、少なくとも何らかの塊）として整える作業が、死生学の中でなされる必要があるであろう。臨床死生学という名は（その名の成立の由来がどうであれ）そのような学問活動にこそ相応しい。リカレント教育を企画するという作業の要は臨床死生学なのである。

日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」

(2008年 2月17日～21日 北京)

竹内 整一 (人文社会系研究科教授 倫理学)

こんど「死生学」プロジェクトが、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」へと継続・発展することになり、そこであらためて東洋・アジア諸地域との研究交流を深めていくことが求められてきている。

もともと「死生学」Death and Life Studiesは、これまで西洋の思想や文化のなかで進められてきた Death Studies・Thanatology と呼ばれてきたものを、より広く多様な視点で、とくに非西洋的なさまざまな思想や文化とつき合わせながら、新しい地平へと切り開こうとめざされてきたものであった。そのような課題をさらに推し進めるためにも、このたび本プロジェクトが第2期に入るにあたり、これまで必ずしも十分ではなかったアジア・イスラーム文化圏との研究交流を本格的に展開していくことが求められているということである。

今年度から来年度にかけては、その手始めとして、最近とみに「死生学」的関心の高まりつつある中国・韓国といった東アジアの国々との研究交流を行う。儒教・仏教・道教、その他の

東アジアの文化・伝統を形成してきた諸要素は、同時に日本の文化・伝統を形成してきたものでもあるが、そこには、同じ概念・発想を共有しながらも、そうであるがゆえに逆に浮かび上がってきた、大きな異質性も指摘されている。そうした点もふくめて、とりわけ「死生」をめぐる思想的・文化的知がいかにか形成されてきたか、また、今それが現在的・臨床的な実践知としていかに活用されているか、あらためて我々自身の、また相互の問題として、ともに考えてみる必要があるように思う。

「東アジアの死生学へ」というテーマは、もとより「西洋の死生学」ではなく「東アジアの死生学」を選ぶといった、安易な二者択一を意味するものではない。これまであまり主題的には問われてこなかった「東アジアの死生学へ」と、それ自体を考察対象とすることにおいて、そこにあるであろうさまざまな可能性や問題性を見すえ、そこから、よりゆたかな「死生学の展開と組織化」への発信を試みようとするものである。

・ 日程・発表者・テーマは、以下のとおりです。

日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」

【研究発表】(2月18日)

- ・ 石川公彌子 (東京大) 近代日本人の死生観
- ・ 森下 直貴 (浜松医科大) <無形のもの>たちのリアリティ
日本人の死生感の現在
- ・ 末木文美士 (東京大) 死者と向き合う仏教の可能性
- ・ 中岡 成文 (大阪大) 弱さの構築 死生の臨床哲学へ
- ・ 鄭曉江 (江西師範大) 「楽天知命」と「安之若命」
儒家の死生智慧についての現代的解釈
- ・ 朱曉鵬 (杭州師範大) 道家の死生観及びその現代的意義
- ・ 張志強 (中国社会科学院哲学研究所) 死生・道徳・革命 晩清における「志士」の理想と
儒仏思想の近代的再構築
- ・ 李萍 (中国人民大学) 職業選択と現代中国人の生命倫理観

【総括・シンポジウム】(2月19日)

- ・ 池澤優 (東京大) 総括：東アジアの死生学 伝統と変革
- ・ 韓鳳林 (中央党校) 現状と動き：中国における死亡哲学研究三十年



今後の予定

ワークショップ「生命科学と死生学の共働」(本号記事参照)

日時 : 2007年12月1日(土曜日)午前11時より

場所 : 東京大学本郷キャンパス・法文2号館・教員談話室

国際シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み」(本号記事参照)

日時 : 2007年12月16日(日曜日)

場所 : 東京大学本郷キャンパス

「生と死をめぐる映画上映会」(仮)

(映画「ひめゆり」文化庁映画賞大賞受賞 上映会 / 監督・柴田昌平氏講演会)

日時 : 2008年1月11日(金曜日)

場所 : 東京大学本郷キャンパス 医学部鉄門講堂

James F. Childress 教授 講演会

日時 : 2008年1月中旬

場所 : 東京大学本郷キャンパス

リカレント教育(本号記事参照)

(医療や介護の現場で働くケアの専門家を対象とした、臨床死生学 集中コース)

日時 : 2008年1月

場所 : 東京大学本郷キャンパス

アカデミック・ライティング集中コース

(若手研究者を対象とした、英語論文を書くための技術と作法を学ぶ集中コース)

日時 : 2008年2月または3月

場所 : 東京大学本郷キャンパス

日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」(本号記事参照)

日時 : 2008年2月17~21日

場所 : 中国・北京 中国社会科学院(予定)

「シンポジウム サバイバーシップとは何か」(仮)

日時 : 2008年4月以降(未定)

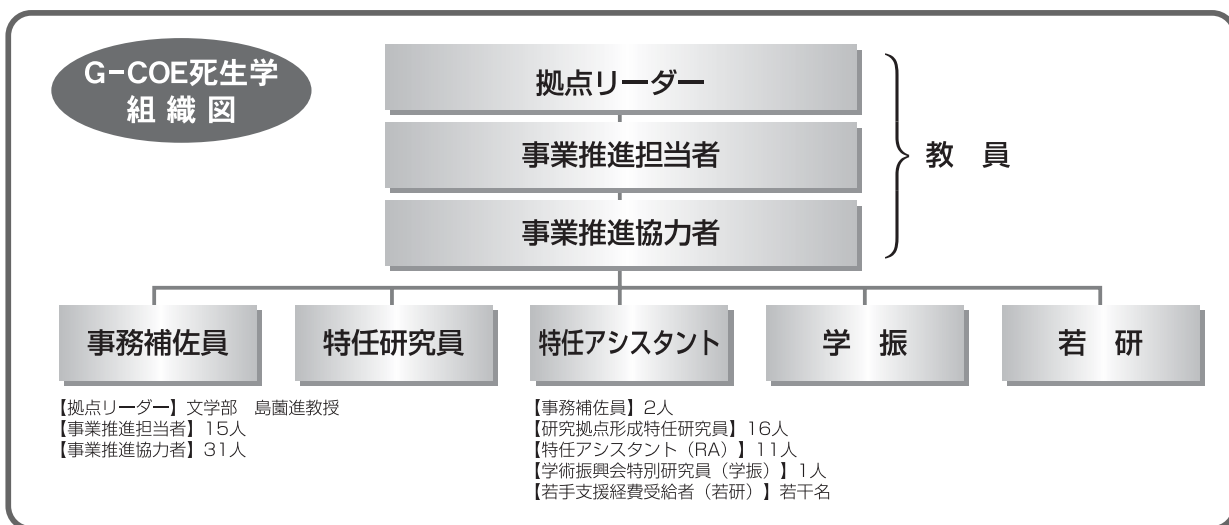
場所 : 東京大学本郷キャンパス

各イベントについての情報は、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」ホームページ
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/> 上に、随時アップして参ります。ご参照ください。



事業推進担当者（計15名）

島 園	進（しまその・すすむ）	宗教学宗教史学
秋 山	聰（あきやま・あきら）	美術史学
安 藤	宏（あんどう・ひろし）	日本文学
池 澤	優（いけざわ・まさる）	宗教学宗教史学
一ノ瀬	正 樹（いちのせ・まさき）	哲学
大 稔	哲 也（おおとし・てつや）	東洋史学
熊 野	純 彦（くまの・すみひこ）	倫理学
佐 藤	健 二（さとう・けんじ）	社会学
清 水	哲 郎（しみず・てつろう）	哲学・臨床倫理学
下 田	正 弘（しもだ・まさひろ）	インド哲学仏教学
鈴 木	泉（すずき・いずみ）	哲学
高 橋	都（たかはし・みやこ）	公衆衛生学・精神腫瘍学・内科学
竹 内	整 一（たけうち・せいいち）	倫理学
中 川	恵 一（なかがわ・けいいち）	医学部附属病院 緩和ケア診療部
山 崎	浩 司（やまさき・ひろし）	医療社会学・質的研究



事業推進協力者：人文社会系研究科・文学部内（計19名）

赤川 学	社会学	月本 雅幸	国語学
市川 裕	宗教学宗教史学	野島 陽子	日本史学
大貫 静夫	考古学	林 徹	言語学
小佐野 重利	美術史学	深澤 克己	西洋史学
唐沢 かおり	社会心理学	藤井 省三	中国文学
木下 直之	文化資源学	本田 洋	韓国朝鮮文化研究・社会人類学
小島 毅	中国思想文化学	柳橋 博之	イスラム学
榊原 哲也	哲学	横澤 一彦	心理学
柴田 元幸	英米文学・現代文芸論	渡辺 裕	美学芸術学
塚本 昌則	フランス文学		

事業推進協力者：人文社会系研究科・文学部外（計12名）

赤林 朗	医学系研究科 医療倫理学・心療内科学	永ノ尾 信悟	東洋文化研究所 南アジア研究部門
石浦 章一	総合文化研究科 環境応答論	西垣 通	情報学環・学際情報学府 基礎情報学
大内 尉義	医学系研究科 生殖・発達・加齢医学	樋口 範雄	法学政治学研究科 英米法学
甲斐 一郎	医学系研究科 老年社会科学	宮下 光令	医学系研究科 緩和ケア看護学
金森 修	教育学研究科 科学倫理学	武藤 香織	医科学研究所 社会学・医療福祉論
川本 隆史	教育学研究科 倫理学・社会哲学		
鬼頭 秀一	新領域創成科学研究科 環境倫理学		

目 次

— CONTENTS —

●グローバルCOE発足にあたって●

「死生学の展開と組織化」の発足に期待して

立花 政夫 2

グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の始まりにあたって

島 蘭 進 3

死生学とがん医療の接点

中川 恵一 5

偶 感

熊野 純彦 6

COE死生学プロジェクトにふたたび特任研究員として採用されて

嶋内 博愛 7

●イベント報告●

Gary Laderman教授講演会・報告

“Death in the United States: Past, Present, and Future”

島 蘭 進 8

●企画案内●

死生学ワークショップ「生命科学と死生学の共働」のお知らせ

一ノ瀬正樹 9

国際シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み」開催にあたって

秋山 聰 10

死生学研究成果を社会に還元する—リカレント教育企画中

清水 哲郎 11

日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」

竹内 整一 12

●今後の予定●

●グローバルCOE「死生学の展開と組織化」組織図●



死生学 DAL S ニュースレター No.18

平成19年11月15日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 島 蘭 進

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>